

途中下車

「全国スモモサミット IN 南アルプス市」 開催される

森谷 修

Osamu Moriya

平成25年7月19～20日の2日間、山梨県南アルプス市（桃源文化会館及び現地圃場）において「全国スモモサミット IN 南アルプス市」が盛大に開催された。

主催は、スモモ産地としては全国一の生産量を誇る南アルプス市のJAこま野（小池通義組合長）、共催として南アルプス市と同市商工会が参画して企画・運営にあたった。

このサミットは「魅力と活力に溢れるスモモ産地づくりを目指して」をテーマに、全国のスモモ生産者代表、関係機関・団体、流通販売担当者等550名が出席し、1日目は基調講演、パネルディスカッション、サミット宣言、交流会。2日目はバス2台を借り上げて、スモモ優良産地として有名な源地区・落合地区の現地圃場並びに共同選果施設の視察研修を行った。

せっかくの機会なのでスモモの歴史を振り返ってみたい。

スモモは中国揚子江沿岸地帯が原産地で、かなり古い時代に我国に渡来し「古事記」「日本書紀」「万葉集」にも詠まれている果実である。

江戸時代に入り西日本を中心に栽培が広がり、明治期には鹿児島、岡山、京都、山梨が主な産地として発展した記録が残っている。

大正期には米国から品質優良な品種が導入され、全国各地に増殖が図られた。優良品種の代表格は現在でも主要品種の「ソルダム」「サントローザ」「ケルシー」などがあげられる。

昭和期の大戦中は一時的に生産が衰退したが、昭和30年代から40年代にかけて再び栽培熱が高まり各地に産地が誕生した。現在のスモモ主産県は山梨、

長野、和歌山、山形、福島で栽培面積は3,150ha、生産量は22,300tとなっている。

スモモは6月から8月が成熟期となる。この時期には夏果実の主役のモモ、ナシ、ブドウが出回り市場を占有するのでスモモは常に脇役に甘んずる日陰の果実であった。したがって小売の店頭でも売り場の片隅に押しやられ肩身の狭い時代が今日まで永く続いた。

主役の座が得られない原因としては、果実の酸味が強いこと、果実が小さいこと、果実が軟化しやすく日持ちが短いことなどがあげられ、多くの小売や消費者から敬遠されたことがあげられる。

「スモモのイメージを一新する新品种の登場」

その品種の名は「貴陽」と称し、南アルプス市落合の「故高石鷹雄氏」が育成し平成8年に品種登録された。

果実は極大で250gを超え（普通のスモモの2倍以上）、甘味は濃厚、酸味は少なく、果肉はジューシー



サミット宣言-壇上に並ぶ全国のスモモ産地代表

で外観・食味とも超一級品である。昨年7月ギネス認定の際の果実の重さは323.77gに達し世界記録の称号を得た革命的品種である。

生産者の念願であったスモモを、夏果実の主役の座を獲得するに相応しい品種の登場を機に今回のスモモサミットの開催に至ったといえる。

私も実行委員の一人として企画・運営に関わった経緯を思い起こし、特に印象に残った出来事を思いつくまいくつか述べてみたい。

○基調講演での(株)東京青果の笹部正専務いわく、「青果物の流通を制する決定打は、価値の創造・発見である」という発言、これからの青果物は現代人の健康増進・機能性を有する成分を特定する努力(価値創造)した産地が勝利者となる。(参考) ちなみに、スモモも老化、癌、生活習慣病の元凶となる活性酸素を抑制する「抗酸化力」成分が非常に高い値で含まれているというヒントあり。

○パネルディスカッションの総括として、全国のスモモ産地は私利私欲を捨て南は九州から北は青森まで、旬は5月(ハウス物)から10月(東北産)までの間、産地が連携した流通販売体制を構築し、生産量30,000tを実現することで意見集約がなされた。

○2日目の現地視察は、前日のパネラーとして招聘した(株)ベルクの野口忠男産地開発リーダーと一緒に回った。「ベルク」は埼玉を拠点に東京、千葉、群馬に80店舗を展開し売上高1,300億円の大手量販店である。

その野口リーダーの弁、今までスモモという果実を見る目を180度変えるべき貴重な経験をしたサミット参加で、現地・現場を知らない勉強不足を痛感した2日間であり、これからは我社もこんなに見事に実った美味しい果実を産地と協力して消費者に提供する流通の仕組みづくりに直ちに取り組みたいという意向を伺うことが出来た。

それにしても産地の責任も重大である。生産地は出荷施設に集まった果実をただ漫然と検査をして市場に輸送するだけ「後は野となれ山となれ」の対応では消費拡大は不可能である。俗に言う川下(小売・消費者)へのタイムリーな情報提供、直接的な消費宣伝が皆無であったことを猛省するやりとりであった。

結びに、今回のサミットは全国初の試みであった。片田舎の小さな農協が「貴陽」のギネス認定の勢いにまかせ国内のスモモ産地に呼びかけ分不相応にも大イベントを決行した。結果的には大勢の参加者が来訪し、開催の主旨である関係者一丸となってスモモ産業の発展のため交流・団結を促進するという所期の目的を達成して幕を下ろした。

終わりに、とかく農協職員の能力資質・姿勢に多くの問題が指摘され世間からの評価は芳しくないが、一連の取り組む姿勢・企画行動力はなかなかのものであった。

どのような難題でも関係者全員が同じ目的と問題意識を共有し、事に立ち向かえば何とかなるものだを実感したサミットであった。

平成25年9月9日(重陽の節句)記
山梨県南アルプス市在住 森谷 修



スモモの革命品種「貴陽」



現地視察(落合地区優良園)